

日本語学習者の言語運用の不思議—学習者コーパスから見えてくるもの—

石黒圭（国立国語研究所）

1. 「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」プロジェクト概要

日本語を第二言語として学んでいる外国人は日本語学習者と呼ばれる。日本語学習者の日本語習得を支援する日本語教育活動の質の向上のためには、日本語学習者が日本語という言語をどのように学び、どのように使っているのかを示す言語運用のデータを収集・分析し、その習得過程を実証的に明らかにする必要がある。

日本語教育研究領域の「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」プロジェクトでは、言語運用を言語使用（「話す／書く」）と言語理解（「聞く／読む」）に分け、それぞれの運用過程を収録したデータを、学習者コーパス（正確には学習者データベース）の形でインターネット上に公開することを目指しており、一部はすでに公開が始まっている。

本発表では、I-JAS（多言語母語の日本語学習者横断コーパス）と B-JAS（北京日本語学習者縦断コーパス）という二つの学習者コーパスを例に、日本語学習者の習得実態と習得過程を明らかにする試みを紹介する。

2. 分析観点の紹介：副詞・接続表現・フィラー

I-JAS は、異なる 12 言語を母語とする海外 17 ヶ国（20 地域）の学習者の発話を集めたものであり、全体としては 1,000 名を超える規模になるが、そのうち約 2/3 の 660 名がすでに公開されている。そのため、この公開データを用い、多様な観点からの研究がすでに進められているが、今回の発表では I-JAS における副詞「もちろん」「やはり」の使用を分析した結果を紹介する。日本語学習者は母語にもよるが、「もちろん」を好んで使う傾向がある一方、日本母語話者は「もちろん」も使うものの、「やはり」をとくに好んで用いるという調査結果が明らかになった。

一方、B-JAS は、北京日本学研究中心との協定に基づいて収集が進んでいるデータで、北京師範大学に日本語ゼロで入学した 17 名が大学 4 年間でどのように日本語を習得していくか調査を行っている。B-JAS には、I-JAS と同様の発話データにくわえ、独自の作文データを収集している点に特徴がある。今回は、発話データからはフィラーの習得について、作文データからは接続表現の習得について、それぞれ分析した結果を紹介する。

フィラーの習得では、学習開始当初は中国語のフィラーを用いているものの、それが中間言語的なものになり、そして、日本語らしいフィラーへと変化していくことがわかった。また、接続表現の習得では、学習開始当初は単文を「そして」「それから」のような接続詞でつないでいく様子が観察されるものの、それがテ形や連用中止形を用いた重文に変化し、さらに、それが多様な接続詞や接続助詞を用いた表現の使い分けに進んでいくことが明らかになった。本発表では、この三つの調査結果から見える日本語学習者の言語運用の「不思議」をフロアの皆さまとご一緒に検討することを目指したい。